



波平麻衣子氏 (WUB宮古会員)

# 青少年の交流広げる

WUB宮古は昨年12月には高校生が適している。できたばかりの支部だ。ハワイのマウイ島への交流プログラムを行っている。高れ、成長しながら3年間を現地の高校に通って教育環境の違いなどを学んだ。マウイの生徒も宮古島に来て交流した。このような交流

関係者が青少年育成に力を注いでいるのを見て、WUB宮古を立ち上げ、WUBのネットワークとして交流をやっていこうという経緯に至った。WUBは歴史があり、ネットワークも広い。将来に続く団体だ。宮古はまだ小さな団体だが、ペルーやブラジルにも青少年交流を広げていきたい。



遠山光一郎氏 (WUBシンガポール会長)

# SNSで機能を紹介

現在、3人の会員で頑張っている。シンガポールを含め東南アジアの県人会は人数が少ない。沖縄のアイデンティティーの継承は東南アジアでの課題だ。WUBは世界中にネットワークが広がっている利点がある。ただ今まで、点である。SNSで機能を紹介して線をつながっていかなくてはならないかと思う。香港は23店舗の飲食店を経営している。よく逆輸入といわれるが、シンガポールや香港などで沖縄料理店を開いた後、12店舗目として沖縄に立ち上げた。WUB香港の役割を考えた場合、人材育

国でも英語を理解できる世代が増えている。そういうものをいち早く取り入れて、どんどん活用していく。では何をj入れるか。コンテンツが問題だと思う。どのようなコンテンツが輪をを広げ喜びや楽しみを得られるか、もうけにつながるか。それを考えることで、ネットワークがさらによくなると思う。



又吉真由美氏 (WUB香港会長)

# ビジネススカラー出す

18年前に香港に移住し、県人会の会長も務めながら23店舗の飲食店を経営している。よく逆輸入といわれるが、シンガポールや香港などで沖縄料理店を開いた後、12店舗目として沖縄に立ち上げた。WUB香港の役割を考えた場合、人材育

てはWUBのビジネスマイノリティの中で生かせたらと思う。沖縄と香港は近くなっただ。直行便も飛び、仕事に関連することも飛び交うようになった。沖縄から香港に、香港から沖縄へ、沖縄からアジアへと考えている人が出てきている。WUBはビジネススカラーをもっと出してほしいだろう。

# ウチナーの心 どう伝えるか

前原信一氏

海外に移住したパイオニア(先駆者)が訪れた土地は、厳しい土地だった。当時のウチナーンチュたちは現実と直面しながらも、身を起こしていった。戦前は当時の県民人口約60万人のうち、10%余の6万7千人が海外に移住した。戦前の県収入の3/4割は移民者の送金などによ

## フロアから

「将来的には英語で」

WUB創設者のロバート・仲宗根氏は、過去にハワイ県人会の会議を日本語から英語に変更したことで、日本語が話せない若い世代の参加を促した事例を挙げた。WUB沖縄の東良和会長(沖縄ツーリスト社長)

は若い世代を引き付け、めには言語面が課題とて、「将来的には会議部が全部を英語で行わなければならない」と提案し、また、主に南米の会費対象だった奨学金制度の他の支部でも活用できることを確認した。牧志会長(第一港運会長)「奨学金制度をさらに広げたい」と意気込ん

は若い世代を引き付け、めには言語面が課題とて、「将来的には会議部が全部を英語で行わなければならない」と提案し、また、主に南米の会費対象だった奨学金制度の他の支部でも活用できることを確認した。牧志会長(第一港運会長)「奨学金制度をさらに広げたい」と意気込ん

基調講演

済が成り立っていた。1987年から海外へび回り番組制作した材をした多くのウチナーンチュには、肝心(チムル)を感じた。一方、沖縄は本土化が進み、チナーグチを話せる人がなくなつた。南米の若チナーンチュが沖縄のウチナーグチで話しづても通じない状態だ。まさにアイデンティ